

論文要旨

【目的】

妊娠中に胎児が予後不良と告げられた母親が、告知の時から子どもを亡くしたその後の経過の中で看護者とのどのような関わりがあったのか、またその関わりをどのように捉えているのかを記述すること。

【方法】現象学的アプローチを参考にした質的記述的研究である。周産期に子どもを亡くしてから1年以上が経過している母親3名に、半構成的インタビューを実施した。看護者との関わりをなぜそのように捉えたのか、意味の成り立ち、構造に注目して分析を行い、個々の母親の語りを記述した。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：17-A048）。

【結果】

Aさんにとって看護者の関わりは、告知のときから看取りの時まで常に、Aさんの思いや感情に寄り添って導かれた配慮とは異なっていた。看取りとなる出産に気持ちが向かっているAさんに対する安易な応答、子どもを亡くした翌日に明るく振る舞う看護者の態度はAさんにとって見当違いな配慮であり、Aさんとは異なる世界から看護者の見解でなされる支援に、Aさんはいつも感覚のずれを感じ、上から目線である、偽善である、と憤りを感じることもあった。Aさんにとって看護者の支援は有意義なものではなく、自分の思いを伝え、必要な支援を得ることができなかった。

Bさんは、妊娠を継続し、子どもを可愛いと思うものの、同時に染色体異常のある子どもを受け入れがたい気持ちもあり、苦悩していた。しかしSOSを拾ってもらえず、むしろ母親失格と烙印を押されたかのような医療者の言葉を受けて、苦しい気持ちは語らず普通の母親として振る舞うことで、看護者とのつながりを築いていた。産後は自責の念で苦悩したが、苦しみを容認し、肯定する言葉をかけてくれた看護者の言葉が子どもを亡くした後の辛い時間の中で救いとなっていた

Cさんは長い入院生活において、頼りになる看護者や配慮のある看護者との間に信頼関係を築き、看護者と共に子どもの病気と看取り、そして子どもの成長をみつめてきた。亡くなる子どもであっても今生きている子どもの存在を尊重し、対応してくれた看護者との時間は、子どもを亡くして時間が経ったのちも、幸せな時間であったと語られた。一方で、看護者の配慮のなかで迎えた出産であったが、分娩の最中に子どもが亡くなっていく様子を、子どもの生のバロメーターである胎児心拍を通して自分で確認できず、また、その死を言葉にしてもらえなかったことは、どちらがよかったか分からない、悔いの残る体験となっていた。

【結論】

子どもが予後不良であることに伴う母親の気がかりは個別的であり、時間と共に変化していた。その時々で母親が体験している世界を知ろうとせず、看護者の世界から提供されるケアに母親は配慮の欠如を感じ、母親の気がかりを拾い、きちんと応える看護者に母親は信頼を抱いていた。母親が体験している世界に近づき、気がかりを共有する姿勢が重要である。